

私、結婚しました!

K a z u b a & T a t s u k i

梶下 裕

Yuu Sugisbita

eternity



エタニティ文庫

目次

私、結婚しました！

5

書き下ろし番外編 私、お仕事始めました！

333

私、結婚しました！

私事で恐縮ですが、この春、宮西万羽^{みやじかみず}は短大を卒業いたしました。卒業おめでとう！
ありがとうございます！

まあ、ちゃんと真面目に学校行ってましたしね。卒業できないんじゃないか……なんて心配は全然してなかったですよ。早く学生という身分から解放されたい、その一心で生きてきたと言っても過言ではないもの。

どうして早く学校を卒業したかったかというと、「大病院を経営している宮西一族」という肩書が大嫌いだから。家族仲は普通に良い方だと思っし、私も家族のことは大好きです。だけど、偉大なる前院長、お祖父様だけは別。お祖父様の名前を聞いただけで軽く吐けるくらいですよ。

祖父は誰に対してもそうなのですが、なにかと他人の言動にケチをつけたがる人で、ニコリとも笑わず冷たい目で暴言を言い放つのです。私も幼少の頃からなにかと口出しされました。

例えば友達と一緒にいるところに出くわすと、その友達の目の前で「宮西の娘がそんな育ちの悪そうな子とは遊ぶな」とか言うんです。ああそうそう、よく成績のことも貶^{ひな}されましたね。

小学校のときからなぜかテストの点を祖父に報告しなければならず、少しでも前回より成績が落ちていれば出来が悪いと罵^{ののし}られ、最後には私の頭が悪いのは母親のせいだと嫁いびり。

ああちよつと、思い出ただけで腸煮^{はわた}えくり返ってくるわ。私の祖父さん、人として最低じゃないですか!?

私のせいで母が悪く言われるのは我慢ならなかったから、勉強は人一倍頑張ったし真面目で教師受けのいい模範的な生徒でい続けました。だけどそうすると、どうしても宮西の肩書がくっついてくる。「さすが宮西の娘」って。それが嫌で堪^{たま}らなかつた。けど過保護な父のせいで学生の間は家を出ることを許されず、遠くの大学へ入学して一人暮らしをするという夢は消えました。

それならさっさと卒業できるように短大にして、絶対県外に就職する！ と決めていたのです。

だけど……短大一回生の冬のある日。

父親が見合い話を持ってきたのですよ。申し訳なさそうに、会うだけでいいから、少

しでも気に入らなかつたら断つていいから！ となぜか必死に私に言い聞かせながら。父親は次男なので、病院の院長は長男……つまり父親のお兄さんが継いでいる。だから立場としては比較的気楽なものです。私にも就職先は自分の好きなようにしていいと言ってくれていましたし、本来なら当時まだ十九歳になつたばかりの私が見合いをする必要はなかつたのです。

なら、なぜこの話が私に回ってきたのかというと、相手方のお父様がとっても頭軽そ……、ゴホン、チャージングな方で「ウチの息子早く結婚しねえかなー、結婚式とかチヨ―楽しそうじゃね？ ああもう我慢できん、見合いだ見合いさせろ!!」みたいなことを言つて、ね。うん、そんなノリだつたらいいですよ、本当に。

最初は院長である伯父様の娘さん、侑莉ゆうりといつて私の従姉妹いとこになるんだけど、この子とのお見合いが水面下で進められていたのです。だけど、もうこれは知つて計はかつたんじゃないかろうかというタイミングで、侑莉がふいに家出をして、帰つてきたと思つたら、ちやつかり彼氏ができていたつていう。

あとで聞いた私は「すげえな!!」と思わず言っちゃいました。ああダメダメ、私だつて一応お嬢様なんだから、こんな言葉遣いしたら怒られてしまう。祖父さんにすつごい目で睨にらまれちゃうよ。

まあそんなわけで、侑莉の気持ちを汲んでいったん見合いは白紙に戻されたのだけど、それで黙つちやいないのが相手方のお父様。見合いをさせろと騒いで収拾つきそうになつたので、司伯父様が、弟である私の父親に「悪い、お前んとこの万羽ちゃんに会つてもらえるか訊きいてくれ!」と泣きついた。(ちなみに司伯父様と相手方のお父様は学生の頃からの友人です)

お兄ちゃんに頭が上がらない父親は、しぶしぶ私に見合いを持つてきたというわけ。父親は私があつさりとして承したものだから、ものすこく慌あやてていた。その慌あやて様ようといつたら、母親と二人で腹抱かぶえて爆笑したくらいでした。

ついでに言つと、ウチの両親は恋愛結婚。宮西病院でナースをした母親を、副院長をしていた父親が見初みそめたらしい。だからなのか、父親はお見合い結婚というものに否定的です。母親は、お見合いだろうが恋愛だろうが、最終的に好きな人と結婚したらいいわよつていう意見なだけだ。

私は面倒事がなければなんでもいいタイプです。

恋に恋したこともないし、好きで好きで堪たまない！ みたいに男の人を想つたこともない。たぶんこれから先もそんなことはないと思う。だから結婚に夢も見てないし、このままだと行き遅れ確定だなあとかぼんやり考えていたから、お見合いの話聞いたときはどんとこい！ つてな具合でした。

別にやりたい仕事があつたわけじゃない。とりあえず宮西の家から離れられたらそれ

で良かったの。

結婚したら苗字も変わるし、なおさらいいじゃない！なんて軽く考えていました。お相手のことにしたって性格の不一致とか、価値観の相違とかは困るけど高望みはない。普通でいいよ普通で。健康で誠実そうならいいです、くらいしか考えてませんでしたよ、ええ。

そんな適当な気分で、でもちょっぴり緊張しながら迎えたお見合い当日——
ほんつとうに申し訳ございません!! 全然期待してないとか、別に不細工でも性格良けりゃいいとか思ってたで大変失礼いたしました!!

危うく高級ホテルのレストランで土下座してそう叫ぶところでした。相手の男の人は大層なイケメンさんでした。

代理見合いだったし、経緯が経緯だし、相手のお父さんが一人で張り切ってるだけだしで、お互いの釣書とか写真とか一切なかったんだよ。どんな人か全く知らなかったんだよ!!

お相手の男性は背が高く、清潔感のある艶やかな黒髪で、瞳の色は色素が薄いのか茶色。目元は涼やかな一重でとても色気がある。派手ではないのだけど、すつきりと整った顔立ちのお兄さんでした。

ああ、スーツ姿もとても素敵でいらっしやるけれど、和服も似合いそうじゃないですかと思ったら涎出そうだった。我慢しろ私！あとでいくらでも妄想していいから、とりあえずこの場は耐えろおっ!! と、口の中の筋肉をこれまでの人生で一番使って、唾という唾を口内の奥へと押しやり、紅茶と一緒に飲み込む。ゴクリと喉が鳴ったのはご愛嬌。

これはもうあれです。一目惚れでした。ビビビとききました。

お父様も噂通りとても面白い人でした。ああいう人好きだよ、見てる分には。息子にすっごい白い目で見られてもめげなくて、終始マシンガントークを練り広げていました。

まあ、そのおかげで妙な沈黙も降りずに和やかに過ごせましたしね。
あんな美形と一時でもお喋りできて至福の極みだったし、しばらくあの人で妄想できるわ満足満足！と幸せな気持ちでいっぱいだった私は、完全にお見合い騒動は終了したのだと思ひ込んでいました。

だって美形で、家柄も文句なしで本人も高給取り。そんなの周りの女の人が放っておかないでしょう。お見合いも仕方なしに来たって感じだったし。

一日経って、私はお風呂に浸かりながらそろそろ現実に戻って明日の学校の準備でもするか、と考えていた。そしたら仕事から帰ってきた父親に、「先方からぜひ話を進めたいと言われたけど……」なんてまた情けない顔をしている犬みたいな表情で言われたもんだから、私は危うく卒倒しそうになりました。

なにそれ!? 伯父様が勝手に返事しちゃっただけじゃないの!? と食って掛かったけれど、どうやらお相手本人から直接打診があったらしい。

私が一も二もなく「こちらこそよろしくお願いします!」と答えたら、父親は今度こそベソをかき始めた。そんな父親を、母親が一晩かけて慰めたとか慰めなかったとか。

そんなわけで! 短大卒業と同時に結婚いたしました。結婚おめでとうありがとうっ!!

嬉し恥ずかし、私、宮西万羽から英万羽になりました。

旦那様の名前は辰季たちきさん。きゃっ、旦那様って言っちゃった恥ずかしい! すんません、浮かれすぎました。自分でも気持ち悪かったのでもうしません。

結婚式はというと、お義父様ととがはっちゃけて大変だった。私の予想をはるかに上回っていた。

まさかミニカーで披露宴会場に乱入してくるとは。会場のスタッフが顔を真っ青にしておろおろしてたよ。お義父様が車から降りてきたときの満面の笑みが忘れられない。父はやってやったよ! という清々すがすがしい笑顔でした。

軽く百人を超えていた人たちの中で大笑いしたのは、私とお義母かあ様くらいだった。

あとで辰季さんは「あの瞬間、縁切ってやろうかと思った」って超笑顔で言っていた。それはもうお義父様の笑みに良く似た、素敵な笑顔でした。

伝説として語り継がれるであろう、このミニカー事件が印象的すぎて、その他については実はあまりよく覚えていなくなっています。ずっと、「うはっ私の旦那様ドライケメン!!」なに着ても似合うのね「ハァハァ」とか、いつ通報されてもおかしくないくらい脳内が騒がしかったので。

うん、それから……初夜? 訊きいちゃう? そこ訊いちゃう?

そうね、初夜ね。恥ずかしながら私、男性経験というものがからつきしありませんで、結婚式の数日前はすごい緊張しました。だけど、確か式の三日くらい前に辰季さんから連絡があつて。

急な海外出張が入ってしまったとかで、披露宴が終わったあとすぐ出発しないと間に合わないという強行スケジュールだね。仕事のことには私にはよくわかりませんが、辰季さんや同僚さん、ついでにお義父様から聞いた話によるとですね……

結婚式当日に出発するというありえない日程のため、職場の皆さんがどうにか代理を立てるなり日をずらすなり、色々手を打とうとしてくれたとのこと。だけど、そのプロジェクトが辰季さん主体で行われているものだったのと、かなり切羽詰まった状況だったという理由で、他の人じゃどうしようもなかったらしいのです。

披露宴に出席して下さった同僚の方々にまで頭を下げられてしまって、私は「気にしないで下さい」としか言えませんでした。

はい。そんなわけではなかったよ初夜。一人で寂しく新居のベッドで寝たよ。キングザイブのテンピユールのベッドで熟睡した。ははは!!

「ごめんね、本当ごめんねって辰季さんは何度も謝ってくれたけど、理由が理由だけに仕方ないですよね。」

しかし寂しいのも事実。ああそんな困り顔もステキ!! 眉下がってるうううつつ、可愛いおかわりください!! としばらくうつつり眺めていたくらいは許してもらいましょう。

英家といえばその筋では有名な(という言い方をすると怪しいけど)、医療機器メーカーの会社を設立した一族で、もちろん辰季さんもその会社で働いている。

辰季さんは二十五歳と若いので、今はまだ営業課でバリバリ頑張っているけど、ゆくゆくはお義父様の跡を継ぐのだそう。

だから、辰季さんにとっても忙しい人なのです。結婚の話がまとまってから、式を迎えるまで一年以上あったけど、会った回数はずぶん指折り数えても両手で足りる。そのほとんどが結婚式の打ち合わせだったし。

だから私たちはデートもまともにしていません。でもお見合いってこんなものなのかなあ。よくわかんない。

つまりなにか言いたいのかと言えば、私と辰季さんはまだ手も繋いだことのない清い仲なのです。

結婚して一週間経つけど、まだ一秒たりとも一緒に生活してないよ! 早く帰って来てえー!

朝、掃除をしていると辰季さんから着信がありました。

『ごめんね、連絡するの遅くなったんだけど、やっと仕事が片付いたから、もう帰れるよ』

「え!? そうなんですか!」

『うん、夜……そうだな、七時くらいにはそっちに着くと思う』

「お仕事お疲れ様でした! 気を付けて帰ってきて下さいね」

という短いやりとりをし、時計を見ると九時すぎでした。

七時かあ……まだ朝だよ長いなあ、とスマホを睨んでいると、急に画面が切り替わってビックリしました。メールが一通届いたらしい。差出人を確認して頬が緩む。

『マンシヨンの下に着いたよ』

可愛らしく文末にひよこひよこ動くデコ絵が飾られているメールをくれたのは、従姉妹の侑莉。昨晚電話で私が一人で暇だと騒いでいたら、遊びに来てくれることになったのだ。同い年の私たちは仲が良いのです。

玄関の鍵を持って急いで外に出てエレベーターに乗り込む。十一階建てのマンション

の十一階が私と辰季さんの新居。

まあ辰季さんは一歩も足を踏み入れてないけどね！荷物運んでくれたのは引越し業者の人だし、一生懸命荷解きをしたのは私と母親だし！辰季さんの書斎になる部屋は手をつけていないけど。

「侑莉！」

「あ、万羽ちゃん！」

オートロックの扉の前にふわふわした雰囲気の可愛らしい生き物がいました。ああ、侑莉ったら今日も今日とて美人さんだわあ。マイナスイオン出てる！！

私は、従姉妹を思わずギュッと抱きしめた。

「結婚式以来だね」

「あのときは全然話せなくてごめん」

「ううん、なんか大変そうだったもの」

そう、意外と結婚式とか披露宴ってやることがいっぱいあって大変！食事をする暇もなかったんですよ。

立ち話もなんだから、オートロックを解除して中に入る。コンシェルジュさんに挨拶をしてエレベーターへ。

このマンションは入り口と出口が別々になって、入るときはオートロックを開けな

いと駄目なんだけど、出るときはエレベーターを降りたらもう玄関の外側なので、そのまま出掛けられる。

侑莉が持ってきてくれたケーキと紅茶を用意してリビングへ行くと、侑莉はそわそわしながら辺りを見回していました。

うん、その気持ちよくわかるよ。家具家電はほぼ備え付けだから、部屋のインテリアコーディネートはプロ仕様。モデルルームにでも住んでいる気分になっちゃうんですよ。

初めて入ったときは「うわあステキー」なんて喜んだ私だったけれど、自分の家だっ て気がしなくて、いまだに身の置き場に困ってしまいます。段々慣れてくるものなのかしらねえ。

私がウエディングドレスを試着してるところや、前撮りしたデータがあったから、それを五十インチのテレビで見ながらしばらく雑談。

なにが悲しくてこんなに高画質の大画面で私の顔を拝まなくちゃいけないのか。美人の侑莉の姿だったら見たいけど。

私と侑莉は従姉妹だけど、お互い母親似なので容姿はあまり似ていません。髪色だけは二人共宮西家の家系によく出る赤茶色をしているのですが、侑莉は染めているので、たぶん私たちが血縁関係にあるとは誰もわからないかなあ。

「はあ、本当に結婚したんだねえ」

「したよう結婚」
 左手の薬指に嵌^はまった指輪を見せる。お、タレントさんが記者会見するときみたい
 だわ。

指輪はピンクゴールドのリングに黒のラインが入ってて、小粒のダイヤが二つついて
 いる、見た目は割とシンプルなもの。

あまり大きいのだと、普段邪魔になるよね、と辰季さんと話し合ってこれに決めました。
 「万羽ちゃんがこんなに早く結婚しちゃうなんて」

「うん。私も絶対侑莉の方が先にお嫁に行っちゃうと思ってたよ」

「え、いや、それはないけど……」

またまたご謙遜^{けんそん}を。侑莉はね、真正正銘のお嬢様なのに家事全般自分でこなしちゃう
 んです。料理なんてもう絶品なんだから！ 手先が器用でお裁縫も得意だし。性格いい
 し美人だし大和撫子^{やまとのしこ}さんだし……日本代表だよ！ いやなんの、興奮しすぎよ私。

「侑莉のウエディングドレス姿は、さぞ美しいのでしょね」

「なにその喋り方……っていうかうっとりした目で想像しないで！ 私なんて全然だから。
 万羽ちゃんこそ本当にキレイだったよ！」

「ああ、それはプロの職人さんに加工してもらったから、なんとか見られる仕上がりに
 なっただけで」

「加工って、化粧のこと？」

化粧もそうなんです、結婚式に向けてエステやらネイルやらと身体の隅々まで整え
 てくれたんですよ。

お肌はつるつるだし、なんだか体型も引き締まったような感じがしましたし、本当あ
 のときに初夜を逃したのが悔やまれます……。今やもう元通りですからね。

「確かに万羽ちゃんは化粧映えるけど、それは元が良いからで」

「はいはい。お世辞はいいのよ」

必死にフォローしてくれる侑莉の言葉を遮^{さへ}る。この気遣い屋さんめ。私にまでそんな
 ことしなくていいのに。侑莉は溜め息を吐いてからうなだれた。表情はどことなくしょ
 んぼりしています。どうしたんでしょう。

「……ごめんね、私がお見合い断ったから」

「え！ 急になに、どうして侑莉が謝るの!?! むしろあんなイケメン回してくれてあ
 りがとう！ って感謝したいくらいなのに」

「イ、イケメン？ あ、確かに旦那さんキレイな人だったね」

私は初めて辰季さんを見たとき、あまりの美形っぷりに衝撃が走ったけど、侑莉にとっ
 てはその程度なんだ。顔の美醜^{びしゅう}にはこだわらないのかな。いや、でも前に写メ見せても
 らった彼氏さんはおっそろしく格好よかったけど。

「ていうか、ごめんねとか言わないでよ、私は自分の意思で結婚したの。新婚気分にな水を差さないでちょうだいな」

「万羽ちゃん、結婚して幸せ？」

「不幸ではないね」

幸せ！とはつきりとは言えない。だって新婚気分なんて言っただけで、旦那様いなし！ 憧れの一人暮らしは大満喫中だけど、新婚生活としては間違ってますよね。

「でもこれから幸せになりたいなあ」

間違っても、早々に離婚なんてことにはならないようにしないと。

私の素直な思いを聞いて侑莉が目丸くしたあと、嬉しそうに笑った。その可愛らしさといったらもう殺人級のもので、うっかり胸を貫かれた私は侑莉に飛びかかる勢いで抱きついた。

今さらかもしれないけど、私ってキレイだったり可愛かったりするものが、本当に大好きなんだなあ。

「あー！ 今の、今の戻ってもう一回！」

テーブルの上にあるリモコンを取って慌てて操作する。つけっぱなしにしていたテレビでは、辰季さんが衣装合わせをしています！

辰季さんってば、私を撮るばかりで自分は全然写真に写ろうとしないんです。なので

私がデジカメをもぎ取って、強引に撮ったのです！

タキシード、フロックコート、モーニングコートを試着している写真が順番に流れる。「うはあ、この腰のラインのエロさはなんだろう！ 足の形がキレイだし長い！ 見てここ、ここ！ お尻のここ、ズボンが変な余り方してない。着こなしが美しい！！ ていうかチラッと見ただけなんだけど辰季さんって細いけど、二の腕とか結構筋肉あるのよ、しかもね」

「あ、うん……へえ。そっか、万羽ちゃんって旦那さんにベタ惚れだったんだね……。でもちよつと見るところが偏ってるというか、マニアックというか」

「あああこれ髪！ 髪セットしてもらってる、顔ちっちゃー！ いやでも辰季さんはやっぱりこの目だよね優しく目を細めて微笑まれた日には心臓破裂するかと思っただよね色気ってああいふことを言うんだろうかじゃあ見つめられたときの私のあの衝動はまさかムラムラして」

「万羽ちゃん帰って来て！ 息継ぎして！ ていうかそれ以上はさすがに……！」

辰季さんの写真を食べい入るように見てたら、どうしてか侑莉が泣きそうな顔をして肩を揺さぶってきた。あら、私ったら必死になりすぎてたのでしょうか。うーん、途中で

「なに？」と首を傾げると、侑莉はホッと安堵した表情になりました。

「ビックリしたあ。万羽ちゃんが壊れたかと思ったよ」

「うん、辰季さんのことになるとよくこうなる。あ、侑莉のこと考えててもこうなるよ」

「え!? ……ごめんなさい」

謝られました。どういう意味でしょう。妄想させてごめんなさい? それとも、ごめんなさいやめて下さい? まあなんにせよ、無意識のことなのでどうにもならないんです。が。

あまり深追いしてはいけないと思ったのか、侑莉はあからさまに話題を変えてきました。

「えーと、えーと。ああそうだ。そういえば万羽ちゃんて料理できたっけ?」

「つ、作れるよ……」

そそそと侑莉から離れる。ついでに目も逸らす。作れるよ一応。結婚が決まったあと、一年ちよつとの間に母親に猛特訓してもらった成果で、包丁への恐怖心も克服しました。だけど美味しいかっつていうのは別の話なんですよ、これが。

自分で作ったものつて、本当に美味しいかどうか分からないんです。

味見しても、バッチリじゃん私つてばやるう! みたいに思ったことないんですよ。母親に訊いても「うんうん、大丈夫大丈夫」とか全然安心もできなければ、アドバイスにもならない言葉しか返って来ないし。

ここで悲しいお知らせです。私、料理の才能ないんじゃないでしょうか。

「大丈夫だと思うけど、でも心配なら料理教えようか?」

「マジ!? 本気と書いてマジと読む!?」

「うんうん、読むね」

「ぜひ! お願いします侑莉様!」

ああ、そうか実は女神だったんだね。大いなる慈母、大御神様だったんだね。後光が見えます。

なむなむと本気で拝みだした私を、必死で現実に戻した侑莉の可愛らしさは犯罪級でした。

私の胸を貫く罪深き女の子ですよ。まあどちらかというと、私の思考回路の方が現行犯ものですけど。

夜の七時半。玄関のチャイムが鳴った。

もう一時間くらい前から今か今かと待ち構えていたので、私は飛んでいく勢いで玄関に向かった。

気分は帰ってきたご主人様に尻尾を振りながらまとわりつく犬です。そんな可愛らしいものかいとツツコミが入りそうですが、あくまで「気分は」ですからね! 言ったも

の勝ちだよ、ふふふ。

「お帰りなさい！ お仕事お疲れ様です！」

ドアを開けた先に立っていたのは、待望のご主人様。

きゃああつと衝動的に抱きつきそうになったのを、なけなしの理性でぐっと堪えて、代わりに笑顔を作る。

「ただいま」

一週間ぶりの辰季さんは、疲れているのかちよつと顔色がよくないけれど、それはそれで哀愁が漂っていて萌える。

「遅くなってごめんね」

「いえ、全然ですよ。あ、荷物持ちます」

辰季さんのキャリーケースをもぎ取って、ぴかぴかの廊下を傷つけないように気を付けないが転がす。

リビングに辿り着くと同時に、ネクタイを緩め始めた辰季さんの仕草を舐めるごとく凝視してから「お風呂に入って来て下さい」と自然に促す。

エロ！ エツロ！ なんか疲れの滲んだ感じがエロさを感じさせます。ネクタイを緩めただけなのになんであんなにカッコいいの？ 心臓が悪い！

ああ、良いもの見たわ。辰季さんがお風呂から上がって来るまで、脳内でエンドレス

リプレイしよう。

荷物の片付けはあとでいいかな。とりあえずメシだ、メシ。

そう思っただけで荷物をリビングの隅に置く。

しばらくすると辰季さんがリビングに戻ってきた。お風呂に入ってリラックスできたのか、顔色が良くなっている。

旦那様と初めてのおうちごはん。

夕飯のメニューは長旅を終えたばかりだし、重いものは食べられないかなあと思っただけで軽いものにしました。

から揚げに豆腐のサラダ、いんげんの胡麻和え、キュウリの浅漬け……って、ここは居酒屋か。主食はビール、みたいな。ビールを飲むのは辰季さんだけで私はお茶ですがね。

父親が出張から帰ってきた日は大抵こんな感じだったから、なにも考えず同じようにしちゃったけど大丈夫かしら……。だ、旦那様に最初に振る舞った料理がこれって駄目ですか!?

びくびくしながら辰季さんの様子を窺ったけど、特に変な顔はしていなかった。

いただきます、とお箸を取る辰季さんの手に、私はうっかり見惚れそうになってしまふ。いかんいかん。

「このから揚げ、美味しいね」

「でしょ！ それは自信があるんです。なんだってそれ作ったの侑莉ですから」

「ええっ、万羽ちゃんが作ったんじゃないの？」

「違うんですねえ。でも柔らかかジューシーに揚げるコツを教えてもらったので、今度は私が挑戦しますね」

「うん、楽しみにしています」

ニコリと笑って、他のも美味しいよ、と付け足してくれる辰季さん。どうよ、私の旦那様のこの優しさ。惚れるなよ？ なんつって。

「ビールのおかわり持ってきたましようか？」

「うん。お願い」

「はいっ」

わあい。なんかこういうやりとりって夫婦っぽくて良いですよね！

どうぞ！ と冷蔵庫から取ってきたビールを手渡すと、なぜか笑われました。なんで？ 出張先での話を聞きながら、ご飯を食べる。そして食器洗いをしたり、お風呂に入っていると……いつの間にかキャリアケースが片付けられている。

しかも私がやるより明らかにキレイに片付いている、だと……？

私こういうのは苦手なんですよね。広げるだけ広げて、さてこれどうしよう？ っ
てなっちゃうんです。

「あ、ちょうどいいところに。お土産買って来たんだ」

「えっ」

お仕事で行ったんだから気を遣わなくていいのに。でも嬉しいので、カーベットに座っている辰季さんの隣にベタリと座った。

この包装の感じからいって、空港で買ってきたものようです。お土産はブランド物のアクセサリーと有名なチョコレート菓子だった。

私のテンションが上がったのがチョコレートの方だったことに、辰季さんは「あれ？」と首を捻ひねっていたけど、スルーさせて下さい。

「ごめんなさい、お仕事なのに気を遣わせてしまって。でも嬉しいですよ」

「気を遣ったっていうか、せめてものお詫わび。いきなり一週間も穴あけちゃったから」

「そんなの気にする必要ありませんよ」

そう言うと、辰季さんはふんわり微笑んで、いきなり私の腕を引いた。私は気が付けば彼の腕の中に閉じ込められていた。

支えが欲しくて辰季さんの胸に手をつく。ああ、パツと見、細いのに、程よく筋肉がついてますね……って私はアホか！ 今はそんな呑気なこと考えてる場合じゃない！

見上げると、至近距離に私の大好きなキレイな辰季さんの顔。これが、ドアップにも耐えられる美形ってやつですね！ てか、え？ ちょ、ええええ！ な、なんで急にこ

んな雰囲気になったの？

いえ、私たち夫婦ですし、別に乳繰り合ったって誰も文句言わないだろうけど、ついさっきまでのほほんとしてましたよね!?

うんまあ、私も辰季さんもお風呂に入ったし、準備万端なんだけど、でも今日は辰季さん疲れて……

「ん！……んう、ふ……あ？」

突然キスをされて、完全に頭が置いてけぼりをくらった。

辰季さんは口腔内に舌を侵入させ、好き勝手に動かす。そのうち歯列や内頬を舐めていた舌が私のものを絡め取った。

涙が出そうになって目を瞑る。羞恥なのかなんなのか、身体中を駆け巡るよくわからない感覚に耐えようと、彼の胸元に置いていた手をぎゅっと握る。

あの、すみません、私しよしんしゃなんですけど……!

「たつき、さん、や、あ！」

少しだけ唇が離れた隙をついて伝えようとしたのだけれど、すぐにまた口を塞がれてしまった。後頭部を固定され、離れられない。

どのくらい時間が経ったのか、全身の力が抜けた頃、辰季さんはようやく私を解放してくれた。

私の頭を肩口に乗せ、宥めるように撫でる。

うう、ビックリしました……。まだ頭の中がぐるぐるしてる。どうして急にこんなことになったのかしら。

「たつきさん？」

名前を呼ぶだけなのに、舌が上手く動かなくて拙い口調になってしまった。

「うーん、今すごい葛藤してる」

「かっとう?」

「俺、明日も朝早いんだよね……」

「え、じゃあ休まないと」

「だよねえ」

そう言いながらも、またぎゅうと強く抱きしめる辰季さん。

え、まさか、葛藤ってやるとかやらないとかって話ですか!? 顔を真っ赤にさせた私に、辰季さんは困ったように笑いながら、もう一度キスをした。

「仕方ない。今夜は大人しく寝ようか」

じゃあ今日はもうしないんですね? という無粋な問いは心の中にしまいました。やぶへびになりそうな気がしたので。い、嫌だとかそういうことじゃないですよ!? ただもう、恥ずかしい……! 心の準備も全然できてないし!

そしていまだ身体に力の入らない私は、辰季さんに当然のように抱き上げられ、そのまま寝室に運ばれたのでした。

* * *

久しぶりに熟睡したおかげで、頭が軽い。

隣に視線をやると、すぐ傍ですやすやとあどけない顔で寝ている万羽ちゃんがいた。ああそうか、もう一緒に暮らしてらんだっけ。結婚したとはいえ、式を終えてからすぐに一週間も出張で離れていたからまだ全然実感が無い。

横向きに寝ているせいで口の中に入りそうな髪の毛の束を払ってやると、くすぐったかったのが身動きする。そして次の瞬間、本当に寝ているのかと疑いたくなるくらい速いスピードで、腕をしゅっと布団の中から出し、俺の手の確に掴んだ。すごい。

目瞑ってるよね？ と顔を覗き込むと、ちゃんと眠っていた。

彼女は初めて会ったときからずっとこの調子だ。驚かされるといふか、目が離せないといふか。

言動が予想の斜め上を行く感じで一緒にいて飽きない。小さな顔についた大きな目で感情を訴えるのが、小動物みたいで面白いし。

見合い相手がこの子に代わったのは驚いたけど、結果としてはまあ良かったんじゃないかなと思ってる。

面識のなかった俺と万羽ちゃんが結婚することになったのは、親父が持ってきた見合いが発端だった。

またロクでもないことを考え付いたのかと俺はしばらく無視を決め込んでいたのだが、まあ、会うくらいならいいか、と気が変わった。

というのは、親父がうるさかったというのもあるのだけれど、独身でいるのが面倒くさくなったからだ。独身は気楽にいられるのならいいのだが、俺の場合、周囲がうるさくてかなわない。

親父に似たこの顔が、女性に好かれやすいものだという自覚はある。言い寄られることも少なくない。来る者は拒まず遠慮なく手を出せばいいと言う奴もいるが、俺はそうしたいとは思わなかった。

性に関して淡泊な方なんだろう。彼女がいるときはもちろんセックスするけど、それ以外の女性と関係を持つなんて考えたこともなかった。

後腐れのないセフレでいいと言ってきた女性もいたが、セフレなんてものの方がよっぽど後々面倒なことになりそうだ。

あんたらそんなことしか考えられないのかと言いたくなる。それともコイツらが普通で俺が変なのか？ とても付き合ってられなかった。

だから、既婚という事実があれば、そういう輩やからに対しての牽制けんせいになるだろうと思ったのだ。

愛情はなくても、どうせ一緒に生活するなら良好な関係を築きずける人の方がいい。それができるような人なら誰でも良かった。

そんな不純な動機で臨んだお見合いは、最初からグダグダだった。もちろん親父のせいで。

「そうだ。辰季に渡した釣書つがきと写真なあ、あれ侑莉ちゃんのだったけど、今日会うのは万羽ちゃんって子だから」

「は？ ……はあ!？」

最初な言ってるのかわからなくて、意味を理解してからもう一度大きな声を出してしまった。

つまり、釣書の子とは全く違う相手と見合いするということか。お見合い場所のホテルへ向かう車の中で、ありえないことをさも些細ささいなことのようにつけてのけた親父のネタタイを絞め上げる。

「どういふつもりだ……」

「えー、だって侑莉ちゃんに彼氏ができちゃってー、断られちゃったからさー」

「普通そこで取りやめにするだろ!？」

「だって父さん、お見合いしなかったんだっ!!」

「するのはあんたじゃなくて俺だ!」

やっつけられない。常識がないのはこれまでの付き合いで知ってたけど、これほど酷かったらどうか。

仕事はできるからまだ人間として認識しているけど、これで仕事もできなかつたらただのゴミクズだ。俺と似た顔をしているものだから余計に腹が立つ。

ていうか、万羽って誰だよ。きっと宮西院長の娘さんとの話が破談になって、親父は相当ゴネたんだろう。

それで代わりの女の子を立てることになったのか。相手には同情する。どんな娘かは知らないけど。

「万羽ちゃんは司の弟の娘さんで、歳は侑莉ちゃんと同じだから、まだびっぴちびちの——」
親父が見合い相手の説明を始めたけど、俺はもういいとシートに座り直してずっと窓の外を眺めていた。

「すみません、お待たせしてしまって」

親父にしてはまともなことを言いつつ、ある父子連れのもとへと近づいた。席を立つた父親に倣^{なま}って立ち上がった女の子と目が合う。

彼女は赤茶の髪を緩く一つに纏^{まと}めていて、じつとこつちを見つめる大きな目が特徴的な、小柄で可愛らしい子だった。にこりと笑うその表情に澆^{ほろ}澆^{ほろ}さを感じる。

彼女はほそりとなにか呟^{つぶや}いたようだったけど、聞き取れなかった。

俺は外見はそんなにこだわらない方だけど、可愛いならそれに越したことはない。性格に関しても大抵の人となら合わせられる自信はあるから、よほどのことがない限り大丈夫だ。

「万羽ちゃん初めまして！ 噂はかねがね聞いてるよ」

「初めまして英さん。どんな噂でしょう、気になります」

「いやあそれはもう可愛くて、誠^{まこと}くんが溺愛^{せきあい}してるっていう」

ちろりと娘に無言で睨^{にら}まれた宮西さんは、首を振って大慌^{おどろ}てで「違う違う！」と否定した。なにが違うんだろうか。

「えっと、ああ、辰季くん久しぶりだね」

「お久しぶりです。今日はよろしくお願いします」

俺たちのやりとりを聞いて、万羽ちゃんが不思議そうに首を捻^{ひね}る。工作上、何度も病院へは通っているから宮西さんとは顔見知りなのだ。

そう説明された万羽ちゃんは頷^{うなず}きながら俺の方を見た。

またジツと、観察するように見られて俺はどうしたらいいのかわからず、とりあえず笑ってみる。すると彼女は花が綻^{はなごほ}ぶような笑みを返してくれた。単純だけど、ああ良い子そうだな、と思った。

結婚するにあたって、相手に求めるものは特にない。だけど一つ要求するならば、それは一癖^{くせ}もある俺の両親と折り合いがつけられることだ。

親父は見ての通りこれだし、母も全く違うベクトルで突き抜けてる人だから、なかなか合わせられる人はいないだろう。

万羽ちゃんはマシンガントークを繰り広げている親父と笑って会話をしていた。

「そういやさあ、誠^{まこと}くんって奥さんと恋愛結婚だったっけ？ しかも職場恋愛！ ねえねえどんな感じなの？ どっちからアプローチしたの!？」

「え、僕の話ですか……?？」

「いやあ、だって一度は憧れるもんじゃない。オフィスラブ」

「私もお父さんたちのなれ初^そめって聞いたことないなあ。あ、英さんと奥さんはどうだったんですか?？」

万羽ちゃんはウチの父親の質問に加勢するように見せかけて、宮西さんのフォローに入った。父親は話をかわされたことにも気付かず、上機嫌で話し始める。

「ウチはねえ、幼馴染^{わかなじみ}でちっさい頃からずーっと一緒でさあ。まあ色々あって結婚したの」説明がざっくりしすぎだろう。別に両親の過去なんて知りたくもないけど。

このあとも続いたツッコミどころ満載の父親の話に最後まで付き合ったのは、万羽ちゃんだけだった。俺は最初から参加するつもりはなかったし、宮西さんはさっきみたいに巻き込まれるのが怖いのか、傍観気味だし。

彼女はたまにこっちを見て、目が合うと笑って父親の方に視線を戻す、という仕草を何度か繰り返し返した。父親を止めろという合図だろうか？ でもそれにしてもはしゃいだような雰囲気はない。

「そうそう中学のときなんだけどね、クリスマスプレゼントなにがいい？ って訊かれたから、猫型ロボットって答えたの。そしたらさあ、次の日学校に行ったらオレの靴箱の中に青い服を着せられた猫が入ってたんだよ！」

「ぶっ!？」

コーヒーを飲んでいた宮西さんが噴き出した。むせる宮西さんの背中を擦りながら、万羽ちゃんもすごい笑っていた。

「その猫、本物だったんですか!？」

「もちろんだよ。扉開けたら、みーみー鳴いてて驚いたのなんのって。それで靴箱の陰に隠れて様子見てた奥さんがさあ、オレの肩叩いて『良かったな、サンタさんが願いを

かなえてくれたぞ』って、いい笑顔で言うんだわ!」

「あはははっ」

叶ってないだろ、猫型ロボットじゃなくてただの猫じゃないか。

というか、それをしたのが俺の母親だっていう事実がどうしようもなく恥ずかしいんだけど。なにやっつてんだよ、あの人。

「いいですねー! 素敵なサブライズですね!」

「うん、この子と結婚しようって思ったのは、もしかしたらあの瞬間だったんじゃないかな」

なんでだよ。どこにそんな要素があったのか全く理解できないんだけど。

万羽ちゃんもどこまで本気で受け答えしているんだか。それにしても、俺の父親とこんな会話を弾ませられるってすごいな。

父親もこんな気分良さそうにペラペラ喋^べってるってことは、万羽ちゃんとの会話が心底楽しいんだろう。

まだ学生なのにすごい子だ。

「オレのことばっかり話しちゃったねえ。よし、じゃあこれからは辰季について語ろうか!」

「黙ってる」

お手拭きを父親の顔に向かって投げつける。どうして俺の話を父親がするのか。クスクスと笑う万羽ちゃんに向き直る。

「ごめんね、こんなので」

「いえ！ 実は上手く会話できなかったらどうしようって緊張してたんですが、英さんのおかげですごく楽しくって。代理を立てるなんて失礼をしましたのに、今日は本当にありがとうございます」

朗らかな笑みを浮かべながら万羽ちゃんは頭を下げた。

良い子だな、と思った。社交辞令じゃなく、本当にそう思っていることが伝わってきたから。この子はとても正直な子なんだろう。

受け答えがしつかりしていて、ウチの両親とも上手くやっていけそう。性格も問題なさそうだし、しかも可愛い。

俺が結婚するにあたって求めるものを、彼女は全部持つてるんじゃないか？

少し考えてみる。仕事から帰ってきて「お帰りなさい」と迎えてくれるのが万羽ちゃんだったなら……それは悪くないかもしれない。というか結構いいんじゃないだろうか。見合いの帰りに親父にどうだったと訊かれたので「あの子いいね」と素直に答えたら、翌日には母が結婚式場のパンフレットを用意していて……頭大丈夫かと罵る羽目になった。

万羽ちゃんは十九歳らしいし、まあ駄目だろうなと思いつつも話を進めたい旨を伝えたとこ、予想に反してあれよあれよという間に本当に結婚することになった。

「万羽ちゃん」

「うあい」

名前を呼ぶと、目を瞑ったまま返事をした。これは寝言なんだろうか。

「万羽ちゃん、起きなくていいから手を放して」

「んー、やだあ」

………可愛いな。ぎゅうと俺の手を握って、自分の胸元に引き込もうとする。お菓子を取られまいとする子供みたいだ。

いつの間にか両手でしっかりと掴んで、さらに手におでこをくつつけてくる。面白いからもうちょっと見ていたけれど、そろそろ起きて仕事に行く用意をしないと。

「万羽ちゃん……かずは？」

普通に言っても反応がないので、耳元で呼んでみる。すると彼女の肩がビクツと跳ねた。「ほうあっ！」

ぱちつと大きな目を開けた万羽ちゃんは、俺の手をしばらく凝視していた。

あ、眉間に皺が寄った。どうやら指の本数が多いのに気付いて訝しんでいるらしい。

俺のだよ、君が掴んでるんだよ、と心の中で説明する。

万羽ちゃんはわきわきと自分の両手を動かし、自分以外の手があることを認識した。すると「出たあっ！」と叫んで勢いよく上体を起こす。

「出たってなにが？」

笑いを堪えたつもりだったが、少しだけ声が震えてしまった。

万羽ちゃんは俺がいることに気付いてなかったのか、はっと目を見開いてこちらに視線をやる。

万羽ちゃんは覚醒するまでは時間がかかるけど、その後はすぐ起きられるタイプらしい。

「あ、たつきさん……の、手？」

「うん、俺のだね」

「び、びっくりした、落ち武者のかと」

「なんで落ち武者!?」

どんな発想だっ！ 百歩譲って幽霊とかならまだわかるけど、落ち武者って……

「す、すみません……あの、私ずっと辰季さんの手握ってました？」

起き上がった俺を、上目使いに窺ってくる様子は犬っぽい。つい、頭をよしよしと撫でてしまう。

「いや、少し前だけど。でもすごい大事そうに握ってたよ」

「ウンツ!? ごめんなさい、私」

「謝る必要ないでしょ」

顔を真っ赤にした万羽ちゃんは、涙目で俺を見上げた。そんなに恥ずかしくならなくてもいいのに。

「私、涎たらしてませんでした!？」

「ええっ、そこ!？」

一番に気にするのがそれって、やっぱり面白い子だ。

「大丈夫。ついてないよ……たぶん？」

「きゃーっ!! ごめんなさいー!」

俺の手をまた掴んで、自分のパジャマの袖でごしごしと擦る。朝から元気な万羽ちゃんをとりあえず落ち着かせてから、俺はようやく着替え始めた。

「あの……」

布団に半分顔を埋めながらこちらを見ていた万羽ちゃんが、おずおずと言う。

なに？ と目線で問えば、万羽ちゃんは少し躊躇ってから「おはようございます」と朝の挨拶をした。

「うん、おはよう」

「嬉しい！ やつと言えた！」
 万羽ちゃんはすごく嬉しそうだ。やつぱり一人で寂しかったんだろうな。
 一人でお留守番偉かったね、という思いでまた頭を撫でると、ふにやりと笑った。
 可愛いな。

* * *

カチ、カチ、カチ。

壁にかかった時計の秒針の音だけが室内に響く。

私はただ今リビングのソファでクッションを抱き込みながら体育座りをして、ジッとしています。無よ。心を空っぽにするの。やればできるはずだわ、万羽。

「だあああムリいいい!!」

抱えていたクッションをグーで何度も殴る。ぼふ、ぼふとくぐもった音が時計の音と重なる。

さっきから私の頭の中をぐるぐる回っているのは、辰季さんの生着替えシーン……
 じゃなくて、じゃなくて!!

辰季さんのキレイな腰のラインをうっかり思い出し、鼻血が出そうになってしまい、

必死で頭の奥へと追いやる。振り払うんじゃなく、脳の奥にある引き出しの中に大事にしまおうです。宝物のようにそっとそっと。

そう、飛び降りても足を挫いたりしない程度の穴があったら入りたい。

寝起きだったからいまいちわけがわかってなかったんですよね、私。そのせいで、なんか色々口走っちゃいましたよ、私っ!!

なんで落ち武者? なんで涎!? しかも起き抜けにすっごい変な叫び声を上げたよ
 うな気がするんですが!

辰季さんの手を掴んで離さなかったのは、あのキレイな手に触れたいという願望がむき出しになった結果に違いありません。

ああ変な触り方してなかったかな、寝てたんだからさすがに大丈夫かな……しかし悲しいかな、自分自身を全く信用できないので、してないとは言いい切れない!

辰季さんは優しいからなにも言わなかったけど、呆れられてないかな。なにしてんだ、なに言っただコイツって、引かれてないかなあ……

ひとしきり悶絶し終えたら、今度は怖くなってきました。

さっそくやらかしてしまいましたよ。もうちょっと猫を被っていたかったのに。こんなでこの先やっていけるのかしら。

しかし、欲望に負けて無意識に触るとかどれだけ変態なの、と自分を罵りながらも思

い浮かぶのは、朝から色気を垂れ流した辰季さんの姿。

私の脳みそはもう末期です。もういいよ、辰季さんが素敵すぎるのが悪いんだ。そう、そういうことにしておこう。

いつまでもソファでごろごろしているわけにもいきません。なんせ私には洗濯と掃除という使命が課せられているのですから。今日は用事もあるしね。

ちやちやつと家事を終わらせて、少し念入りに身支度を整える。

透け感のあるレースのシャツにパステルグリーンの手拭スカートを合わせ、デニムのジャケットを羽織る。髪はハーフアップに。この一週間、手抜きがちだった化粧もぼつちりした。

なんかね、近所のスーパーに行くくらいなら、スッピンでもいいかなあとか思っちゃうんですよね。こういう手抜きが女子力低下を招いているのはわかっているんですけど……だってスーパーを往復するだけなんだから、化粧してる間に行つて帰つてこれちゃうんだもの。とか心の中で言い訳をしつつ、姿鏡の前で一通り自分の格好をチェックしていざ出陣！

目指すは英家！ うおおお緊張するううう……

実は昨日お義母様から電話があつて、私たちの結婚のお祝いのお品がいくつか届いているから、取りにいらいっしょいと言われまして。車で迎えに行くと行って下さったけれど、

丁重にお断りした。だつてお義父様もついてくるとか言うし。

いえ！ お義父様と同車するのが嫌というわけではないのですよ、決して！

ただあの、お義父様お仕事は……？ まさか私の迎えのために入社拒否するつもりじゃあないですよ？ と不安になつたので。

断つたあとも電話の向こうで『パパが迎えに行つてあげるよ！』と大騒ぎしてたのでどうしようかと思つたんだけど、なぜか途中で声が途切れてお義父様が静かになつたんですよ。

お義母様がじゃあ好きな時間に来ればいいと言つて下さつたので、たぶんなんらかの方法で瞬時にお義父様を納得させて下さつたのだろう。

さすが長年連れ添つた夫婦。お義母様はお義父様を手の平の上でコロコロと転がす術を習得しているのね。

英家は駅前からバスに乗つて二十分。山手の高級住宅街の中にある。

デザインナズっぽいお洒落な邸宅です。ウチの実家と違って大きいのです。さすが社長さんちは違う。

まあウチも宮西家直系の次男の屋敷なんだからと、だだっ広い家にさせられそうになつたらしいんだけど、母親が「大きい家は掃除が大変だから嫌!!」と突っぱねた結果、

普通の大きさの家になったそうです。

そんなことはどうでもいいんですが、着いちゃいましたよ。防犯カメラ付きの英家に。おおチャイム鳴らすの勇氣いるわあ。

カタカタ震える指で鳴らすと、すぐに女の人が応対してくれた。防犯カメラが少し動いて私を確認しているようだったので、顔を向けてからペコリと頭を下げる。自動で開いた門扉を潜って玄関まで行くと、若い男の人に中に入るよう促されました。

「いらつしゃい、万羽さん」

「こんにちは、おじゃまします」

通された応接室にはお義母様がいらつしゃった。茶髪のショートカットという見た目通り、とてもさばさばした人です。

初めて両家の顔合わせをしたあと、ウチの母親が「英さんの奥さんて素敵な人ねえ。もう少しで惚れちゃいそうだったわ」と呟いたくらいなのですから。

父は情けなくも「あの人には敵いそうにないからやめて！」と男のプライドとかないのかと言いたくなるほど必死に訴えていました。

「わざわざ来てもらって悪いね。結構な量だからマンションに送っても良かったんだけど、せつかくだからゆつくり話でもしたいなと思って」

「いえ、呼んでいただいて嬉しいです」

遊びにおいでって言ってもらえるのは素直に嬉しいですよ。お義母様はにっこりと笑って頷いた。その表情が少し辰季さんと重なる。彼の容姿はお義父様似なのに不思議。「英家の嫁として、見ておいて欲しいものがあるね」

お義母様が笑顔を引っ込めてまっすぐに見つめてくるので、私も表情を引き締める。

神妙に頷くと、家政婦さんが静かに近づいてきて二冊のアルバムをお義母様に手渡した。も、もしやそれは……！

「辰季の幼少時代の恥ずかしいショット満載のメモリアルだよ。奥さんになる子に、これを見せながら暴露話をするのが私の夢だったんだ」

にやりと小悪魔的な笑みを浮かべるお義母様も素敵です！ アルバムを受け取ったときは懐かしそうに目を細めていたのに、そんないたずら心もお持ちだったのですね！

いやしかし、辰季さんのお宝写真集を見せてもらえるなんて、こんな僥倖あっていいのか……

この幸せに対価が必要ななら、明日私は死んでしまうかもしれません。しかし死して悔いなし！ 余すことなくこのアルバムに載っている辰季ちゃんやら、辰季くんやらを舐め回すように見る！ 目に焼き付ける！

はっと我に返ったときには、窓ガラスから差し込む光にわずかに橙が混じっています

た。辰季メモリアルに集中しすぎました。

マ、マズい……私一体どんだけの間、小さな辰季さんに夢中になってたの!? お義母様がいなくなっていたことにすら気付かなかったなんて!

だって女の子みたいに愛くるしい幼少の頃から、だんだん男の子になって、イケメンへと成長していく様が見られるんですよ!

辰季さんのやんちゃなエピソードもいっぱい聞けたし、ああ大満足。ずっと見ていたくらいだけど、と断腸の思いで部屋を出ると、こちらに戻ってこようとしていたお義母様と鉢合わせた。

「夢中だったね、もういいの?」

「はい、キリがないので。それにそろそろお暇しないと」

「ああそれなんだけど。夕飯は食べていきなさい。浩巳さんがこっちに辰季を連れて帰ってくるらしいから」

浩巳さんというのはお義父様の名前です。真面目に仕事してる辰季さんのところにお義父様が乱入して、そのまま引きずって連れて帰ってくるシーンが脳裏を過ぎった。

うーん……辰季さんはプチ切れそうだけど、あんまり根詰めて仕事するのは身体に良くなさそうだしね、私としても早く帰って来てほしいから、お義父様グッジョブ。

「じゃあ、お言葉に甘えてご馳走になります」

「うん、任せとけ」

料理するの私じゃないけどな、と身も蓋もない事実をお義母様はあつけらかんと言う。

そりゃこんな立派なお屋敷の奥様が自分で家事なんてしないですよねえ。お手伝いさんを雇うのもステータスの一つ。

「それじゃあ、今のうちに辰季の部屋見てみる?」

「え!? でも、勝手に入っちゃ……」

「いい、いい。息子の部屋に入るのは母親の権利だし、夫の部屋に入るのは妻の特権だろ」

お、お、男前やあああ! 言い切った! にやりと口角を上げて流し目で言われちゃった。心臓がずきゅんってなったよ!!

はわあ、さすが辰季さんのお母様。さっさと二階に上がろうとするお義母様の後ろをちょこちょこついて行く。いいのかなあと若干の罪悪感を感じつつも、すでに入る気満々な私。

そっか、そうだね。当然だけど辰季さんはこの家で暮らしてたんだよね。

そう思うと、妙にそわそわしてきましたよ!

大学に入学すると同時に家を出たって言ってたから、高校卒業までの十八年間、辰季さんはここに居たんだ。

「御開帳!。あ、エロ本は探したけどなかったよ、残念だったな!」

お義母様は私のしみじみとした気分を一瞬で吹き飛ばした。
うん、やつはお義父様と夫婦やつてる人なだけありますね！別にエロ本なくても残念じゃないですよ！

しばらく辰季さんの部屋を眺めていたのですが、お義母様に促されて一階に戻ります。そろそろ晩ご飯の準備に入るそうです。もうそんな時間ですか……

私の前を歩いていたらお義母様がぐるりと振り返って、嬉しそうに笑った。

「今夜は、鍋だ！」

「鍋ですか！」

良い肉と野菜をもらったからと、今晚は鍋パーティーをするそうです。

食材は全てキレイに切り揃えられてテーブルの上に鎮座しています。

私が一番に目を奪われたのは当然お肉様でした。霜の降り方が秀逸……！確かに良い肉だ。一体どのどなた様にいただいたのかは知りませんが、最上級の和牛に違いありません。

野菜も新鮮そうなものばかり。美味しくないわけがない。
「季節はずれかとも思っただけど、同じ鍋の飯を食わなきゃ仲良くなれないって言うからな」

とお義母様が胸を張って仰られました。同じ釜の飯を食った仲って意味……？でも

なるほどと頷いちゃいました。

いっぱいもらったからと、お肉も野菜もおすそ分けしてもらえることになりました。

よっしゃ！

「たっだいまー！」

そうこうしているうちに、低い声が室内に響いた。お義父様だ。その後ろには疲れた顔をした辰季さん。疲れているのはたぶん仕事のせいじゃない。

「お帰りなさい」

「ただいま」

目を細めて微笑む辰季さん、眩しいっ！

さっきまで幼い頃の辰季さんをずっと眺めてたせいかな、こんなに立派になって……と近所のおばちゃんのような目で見てしまう。

「一人で大丈夫だった？」

「ちよっと、私が苛めるみたいな言い方はやめないか」

「姑と二人きりなんて堅苦しいもんでしょ」

腰に手を当ててムツとするお義母様に、しれっと辰季さんが返す。私は必死に首を横に振った。

それはもう緊張はしましたけれども、お義母様はとでも良くして下さいました。

「たくさんお話できて楽しかったです。辰季さんの子どもの頃のアルバムを見せてもらったんですよ。すごく可愛かったです！」

それはもう涙りましたとも！ 保育園に行きたくないと泣いてる辰季ちゃんとか、もう鼻血ものの可愛さだった！ あの瞬間を激写してくれたお義父様に感謝の手紙をしたためようと思っただけでした。

拳を握りしめて力説すると、辰季さんが苦笑しながら私の頭を撫でた。興奮気味に語る私にお義母様は頷く。

「えらく気に入ったみたいだから、良かったらあれも持って帰るか？」

「いらないよ」

「えー……」

即答で拒否した辰季さんに、ついつい不満が口をついてしまった。

辰季さんが変な顔をしている。あ、やってしまった。

慌てて目を逸らしたら、辰季さんが私の顔を覗き込んでニッコリと笑う。

「じゃあ、今度は万羽ちゃんのアルバムと一緒に見ようか」

「そ、それはイヤ！ それはダメ！ そんなことしないでいい!!」

「じゃあ、俺のアルバムを持って帰るのもなしね」

そんな殺生な！ 辰季さんと私とじゃ被写体の出来が、天と地ほど違うじゃないです

か。私のなんて見たって全然面白くもない。つまらないだけだよ。

ああ残念無念だわ。仕方ない、辰季さんの写真は心のアルバムに貼り付けておくとします。

「話をついたか？ そろそろ座って鍋食べよう」

お義母様に手招きされてテーブルに戻る。

さつきからやけにお義父様が静かだと思ったら、せつせと鍋の準備をしていた。

具材を入れる順番と場所で全てが決まるのだそう。そうですか、あなたがかの有名な鍋奉行様でしたか。

「ほら、肉がもう頃合いだよ、早く！ 今を逃すと大変なことになる！」

という感じでひとしきり鍋奉行としての任を終えると、すぐに普段通りの底抜けに明るいお義父様に戻った。そして、お酒に酔って息子に絡み始め、最終的に騒ぎすぎてお義母様に物理的に黙らされました。

そうか、昨日電話の途中で急に喋らなくなったのも、首に手刀入れられて昏倒したからだったのか……。見てる分には本当に面白い人なんですけどね。

お祝いの品と野菜と肉を抱えてバスに乗って帰るのはさすがにきついので、車を出してもらえらるようになりました。

結局マンションに帰ってなんやかんやとしていると夜も更けて、ようやく落ち着いたのは十一時前。リビングでパソコンの画面を睨んでいる辰季さんの隣に座る。

「あ、そうだ。金曜の晩、会社の飲み会があるから帰って来るの遅くなるんだった」「そうなんですか。わかりました」

会社の飲み会かあ、大人なイメージだなあ。女友達とわーっと飲みに行ったことならあるけど、それとはまた違う感じなんだろうなあ。

あれはあれで、素面じゃ絶対にはできない暴露大会になるから好きです。「飲み会ってよくあるんですか？」

私は社会人というものになり損なって経験がないので、いまいちイメージができない。やっぱり、しょっちゅう飲んではいけませんよ。帰ってくるものなんだろうか。そんな辰季さんちよっと見てみたい、という疑問と淡い期待から何気なく訊いただけだったのですか……

辰季さんは微妙な表情をして目を逸らし、口を閉ざしてしまいました。なんで……？「いや、今回は新人の歓迎会で。ほら、俺たちの結婚式とか出張とかでバタバタしてたから、延び延びになって」

あつ、しまった！ どうしてこう私は配慮が足りないんだろう。

「ち、違います！ ただちよっと訊いてみただけなので！ 会社の方と食べて帰って来

るときは、メールでも入れてくれれば全然、私は気にしないので！」

よくドラマなんかで見えるやつだ。しょっちゅう飲んで帰って来て、家でご飯作って待つる身にもなつてよ！ とかつて奥さんが言ってるやつ。

奥さんが悪いとは思わない。ドラマ観ながら、そうだよねえ、家庭をもっと大事にしないよねえって言ってたもの、私。

でも、私の父親も大抵帰りは遅かったけど、私も母も特にそれに対して不満を感じることはなかった。

辰季さんが忙しいのはよく知ってるから、早く帰って来てよ！ と言う気はない。まして、私は全面的に養ってもらっている身なのです。どんなに夜遅くたって、お勤めご苦労様です！ と玄関で三つ指ついて出迎えないといけなくらいです。

それに遅い時間まで働いたらお腹も空くだろうし、みんなでどっか寄って帰るかっとなりませよね。私も学生の頃はよく帰りに友達と買い食いしていたからわかります。

「そこは気にしていいんだよ、万羽ちゃん」

いつの間にかパソコンの電源を落としていた辰季さんが、笑いながら私の頭を撫で、そのままその手を後頭部に回してきた。私は身を任せて目を閉じる。すると唇に温かい感触が降ってきた。

「ん……」

二度三度と触れるだけのものから始まったキスは、舌が私の中に侵入してきたとたん、深いものになった。内側を舐められて吸われて、苦しいと思うと少し離れて、でもまたすぐに入ってくる。

昨日も思ったけど、なんだか食べられてる気分。なんて考えていられたのは最初のうちだけで、あつという間にわけがわからなくなった。

頭がぼーっとして身体が熱い。ドクドクと心臓が跳ねる音が耳元でする。

本格的に苦しくなってきたうっすらと目を開けると、これ以上ないくらい近くにいる辰季さんと視線が重なった。彼は今までに見たことのない表情をしていた。

獠猛な動物みたいに目をギラギラさせていて、私は子供の頃野良犬に睨まれたときと同じように固まってしまった。

辰季さんは距離を取ろうとした私をそのまま後ろに倒す。

いまだフリーズしている私は、上から見下ろしてくる辰季さんを見返すことしかできない。

「万羽」

「たつ、きさ……あ！」

頭から頬、首筋そして鎖骨へと辰季さんは手の平で撫でていく。気が付くと、パジャマ代わりにしているパイル生地のサロペットがあつざりとずらされていた。彼の手が胸

に到達すると、無意識に声が出た。

慌てて手で口を押さえる。この口でさっきまで辰季さんとキスしていたのだと思うと、恥ずかしくて顔が熱くなる。

「可愛いね」

必死で顔を隠そうとする私の手を容赦なく剥がした辰季さんは、余裕たっぷりにそう言った。からかわれてる？

これが経験の差というものでしょうか。どうせないですよ、経験なんて！悔しくなつて睨んでみても、辰季さんは笑みを深くするばかり。

「初めて？」

「わかってるくせに……！」

「うん、ごめんね」

それはなんに對しての謝罪ですか。けれど、そんな問いは首元に口を寄せた辰季さんがうなじに吸い付いたことで消えてしまった。

ちくりと痛みが走って、肩が跳ねる。

「結構気分いいもんだな」

「な、に？」

「なんでもないよ」

そう言うのと辰季さんは、何度も何度も唇を落とす。徐々に下がって行って、とうとう胸の頂を食んだ。

「やっ、たつきさん」

舌で強く転がされて、ムズムズするような妙な感覚に襲われ身体を反らした。浮いた背中辰季さんの手が回り、身体を固定される。

反対の手は変わらずに胸を弄っていて、思わず目を瞑ると、一層刺激が強く伝わってくる気がした。

「は、ん……！ あ、辰季さ、たつきさん」

変な声ばかり出て恥ずかしいから、辰季さんの名前をいっぱい呼ぶ。

息が上がる。酸素を取り込んでいる気がしない。呼吸ってどうやってするんだっけ？

「かすは」

「ん、う」

胸から顔を上げた辰季さんはまた口にキスをする。辰季さんのキスは苦しいのに心地いい。やめたくない。

コクリと二人の混じり合った唾液を呑み込む。

私は離れていった辰季さんの唇を目で追った。彼はお腹までずれ落ちた服を着せ直してくれている。

「たつきさん……？」

どうしたんだろうと呼んでみると、辰季さんは困ったように笑った。

「初めてがここじゃ嫌でしょ」

「いこ？」

はっとした。そうだこりピングのソファだ。熱に浮かされて忘れていた羞恥心が舞い戻ってくる。あ、電気点けっ放し……！

茹でダコ状態の顔を見られたくなくて、私は俯いた。

「あの、じゃあ……」

寝室行つて続けますか？　なんて訊けるかバカア！

あうあうと言葉に詰まる私の頭を優しく撫でて、辰季さんは「今日はここまでだよ」と言った。予想外の答えに思わず顔を上げて、まじまじと彼を見る。

「ゆっくりやろう。初めてなんだから」

さつき垣間見た野生動物みたいな猛々しさは消え、辰季さんにいつもの温和さが戻っている。

「でも、辰季さんは」

「俺はいいの。なんての、草食系？　そんな無理強いするほどがついてないよ」

草食系。なるほど確かに辰季さんはどっちかと言われればそうかも。……じゃああの

ギラギラした感じは私の思い過ぎしかな？ きっと未知の経験で、気が動転してたんでしよう。

ほうほう、と頷きながら昨日と同じように辰季さんに寝室に運ばれた私は気付いてなかった——

本当の草食系は、いきなりソファで押し倒して来たりしないのだということに。

金曜日になりました。今夜は辰季さんは会社の飲み会です。

晩ご飯は私一人だから手抜きメニューです。この前調子に乗ってミートソースを大量に作ったからバスタにしよう。

掃除と洗濯を終えて、スーパーやらドラッグストアに行って色々買い込んで……でもそこまでやってもまだ昼すぎ。

よし、買い物に行こう。いえ、スーパーじゃないです。ショッピングです。電車に乗って、行ってきます！

……家に一人であーっとしているとね、思い出してしまっんですよ。リビングであれとか、それとか。

実はあの日から辰季さんに色々慣らされていたりします。ゆっくりやろう、という言葉通り丁寧にならずに少しずつ教え込まれています。

いっそ一気にやって下さいよ！ と叫びたくなったのは一度や二度じゃないです。もろ本当恥ずかしくて顔から火が出そう。

言いませんよ!? やってとか言えるわけじゃないですけどね!!

辰季さんってどこでスイッチ入るのかわからないから、心の準備がないままいきなり始まるんです。

しかも辰季さんの駄々漏れの色気のせいで、私すぐ思考を放棄しちゃっんです……ガッツ!

脳裏を過ぎった昨夜の辰季さんを奥に引つ込めるために電車の手すりを殴る。公共の場で思い出していることじゃない!

すぐ傍に座っていた男性がビクツとしたけど、気付かなかったふりをします。知らない知らない。

でも辰季さんは有言実行の人。初心者若葉マークの私を慣らそうとするばかりで、私になにかをさせようとはしないんです。だから私は、せいぜい辰季さんの首に腕を回すことくらいしかできなくて。

よくわからないのだけど、あれって男の人にとってはつらい状況なんじゃないんでしょうか。

それとも私に女としての魅力は求めていない!?!